平成１８年度

創生授業実施報告書

愛媛大学共通教育センター

目次

前学期

農林水産業と自然・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・　1
山口聰(農学部)

くらしと政治・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・　2
楢林建司（法文学部総合政策学科）

芸術の世界・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・　7
松久　勝利（教育・学生支援機構）

自然の法則・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・　8
細田　宏樹(教育学部)

後学期

ことばの世界・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・　１０
清水　史(法文学部人文学科)

異文化へのまなざし・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・　１３
村上　和弘(国際交流センター)

雑学のすすめ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・　１５
寺谷　亮司(法文学部総合政策学科)

地球を考える　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・　１６
山﨑　哲司(教育学部)

科目名：農林水産業と自然　　*授業題目：農林水産業と自然*
担当教員：山口　聰(農学部)
受講者数：１５名

重視した教育目的：現物を見ながら・手に触れながらの講義で、自然との共生を実感し、地域の気候風土にあわせて、長い歴史の過程を経て、現在の農業が成立していることを考える切っ掛けを与える。

設定した到達レベル：自然の中で私達が生きているのではなく「生かされている」ことを少しでも気付けるようになる。農林水産業が地域起こしの中心となるための新しい企画を、自分達で考え出せるようになる。

授業をすすめるにあたって特に留意した事柄：現地集合、現地解散型の野外科学という新しい形態の授業なので、事故を起こさない様に細心の注意を払った。また、事前の下見や、教材の調達など、数日をかけて丁寧な準備を行った。

学生の反応：今までの授業と大きく異なっていたので一部の学生ははじめは少し戸惑っていた様子が分かった。説明会で丁寧に解説していたのだが、本当に私が言った通りにするとは思っていなかったところがあったようだ。しかし、すぐに授業の進め方を理解し、目的に対しても十分に理解して、積極的な参加を果たしてくれた。普通の学生にとっては「想定外」の教員であり、講義なのではなかったか。意外性を楽しんでもらえたと思っている。

総合的な判断：現在、大学の改革にとって有害なことは、教員および学生に蔓延するステレオタイプな思い込みであり、そのような思い込みを排除することが、この授業を受けた学生達には実現した。大学とはこういうものだ、講義とはこうでなくてはいけない、教員はこういう存在である、学生はこのようでなくてはいけない、などなど決めつけられて育った学生、決めつけて育てる教員、一番不幸な組み合わせと思っている。今回の、この授業が少しでも大学の教育の多様化につながってくれることを期待している。ほんのわずかな一歩だが、そのような方向に進んだものと自己満足している。

今後に向けた改善点：今回のような、オン・サイト・レクチャーは多彩な知識と経験・技能を備えた教員が担当するのが望ましいので、ベテラン教員の積極的な協力が望まれる。

愛媛大学の学生に学ばせたい教養テーマ：国際貢献につながるボランティア養成に関する基礎的な知識、とくに世界のマイノリティーに対する民族学的な、そして歴史的な理解を身につけさせたい

追加：講義をして感動したこと：
全員が積極的に長いレポートを毎回書いてくれたこと。
長老格の先輩教授が、特別に講師として参加し、大変貴重な授業を展開してくれたこと。
いつも学生達が新鮮な反応を示してくれたこと。
このような形態の講義を許可してくれた共通教育の関係の方々の寛大な計らい（私の所属する専門課程のコースでは、理解が得られず実現しなかった）。

科目名：くらしと政治　　*授業題目：難民問題についてのワークショップ*
担当教員：楢林　建司（法文学部総合政策学科）
受講者数：３６名

１．授業題目：難民問題についてのワークショップ

２．受講者：月曜２時限が３６名（主に２回生）
　　水曜３時限が３６名（主に１回生）

３．重視した教育目的
　難民問題を題材として、「弱者」とされる人々と主体的に関わるために必要な基本的素養を身につけること。

４．設定した到達レベル
(a)　難民問題につき、ごく基礎的なレベルで、知識と情報収集能力を身につける。
(b)　難民のおかれている状況を理解し、対等な人間として、彼らに学びながらそのニーズに応えようとする姿勢を身につける。
(c)　ニーズに応えるため具体的に何をなすべきか、他者と協力し多角的に検討しながら立案する基礎的な能力を身につける。
(d)　自らの考えを魅力的かつ説得的に発表するための基礎的な技法を身につける。

５．授業を進めるにあたって特に留意した事柄
　「肩の力を抜いて、でも真剣に」という雰囲気を醸し出すことを目標に、まず、学生とのアイコンタクトや言葉によるコミュニケーションを重視した。グループ作業の際には、教室を巡回し、こちらから受講生に語りかけたり、受講生からの質問に答えたりした。コミュニケーションを充実させることは、受講生の主体性や協調性を強めることにつながる。「中間期振り返り」も、こうしたコミュニケーションの１つである。

６．学生の反応
　月曜２限と水曜３限との間で差はあるが、多くの学生が授業に前向きに取り組んだ。もっとも、月曜２限の方では、取り組み意欲、協調性、責任感を十分に発揮でない学生が散見され、ややだらけた感じが漂うこともあった。

７．総合的に見てうまくいったかどうか
　中間期振り返り、授業アンケート、担当者が採点した成績のいずれを見ても、クラス単位として見ると、水曜３限の方が月曜２限より成果が挙っている。水曜３限については、「うまくいった」と自信を持って自己評価できるが、月曜２限については、そこまでの自信はない。

８．今後に向けた改善点
　「１回生の文系学生が主体で、男女比も半々程度」という場合には、学生に、新鮮で素直な気持ちや問題への関心が十分にあり、授業はしやすい。しかし、このワークショップ型授業を担当して３年目の今回初めて、「２回生の理系学生が多く、男子学生が８割程度」というクラスで授業をし、学習の動機付け等につき、これまでに経験したことのない難しさを味わった。この点につき、なかなか特効薬的な解決策は見出し得ないであろうが、来年度以降も、授業についてのコンサルティングサービスを利用しつつ、受講生への自然な関わりを強めることで、地道な対応に心がけて行きたい。「新たな課題をもらった」との気持ちで、前向きに受け止めたい。

【授業評価アンケート】

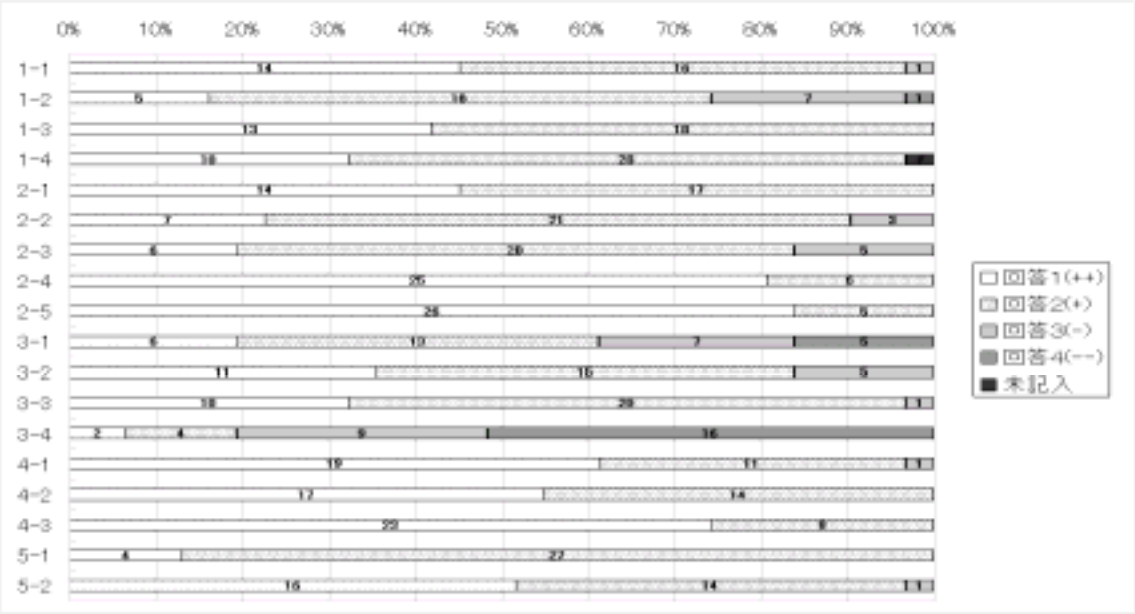
聖徳大学　　平成18年度前学期授業改善のための最終アンケート集計表(科目別)

教養科目_kの関開科目　(生活と制度)　創生授業　18問

科目番号　260 受講者数　36 回答者数　31 回答率　86.1%

科目名　くらしと政治

		合計	回答1 (++)	回答2 (+)	回答3 (−)	回答4 (−−)	未記入	本講義	創生授業 Av
1X-1 目的・目標提示	(人)	31	14	16	1	0	0	平均値 3.4	3.5
	(%)	100.0	45.2	51.6	3.2	0.0	0.0		
2X-2 進度・時間配分	(人)	31	5	16	7	1	0	平均値 2.9	3.2
	(%)	100.0	16.1	51.6	22.6	3.2	0.0		
3X-3 関心・興味	(人)	31	13	18	0	0	0	平均値 3.4	3.6
	(%)	100.0	41.9	58.1	0.0	0.0	0.0		
4X-4 シラバスどおりの授業	(人)	31	10	20	0	0	1	平均値 3.3	3.4
	(%)	100.0	32.3	64.5	0.0	0.0	3.2		
5X-1 わかりやすさ	(人)	31	14	17	0	0	0	平均値 3.5	3.5
	(%)	100.0	45.2	54.8	0.0	0.0	0.0		
6X-2 教科書・プリント	(人)	31	7	21	3	0	0	平均値 3.1	3.3
	(%)	100.0	22.6	67.7	9.7	0.0	0.0		
7X-3 視聴覚教材	(人)	31	6	20	5	0	0	平均値 3.0	3.2
	(%)	100.0	19.4	64.5	16.1	0.0	0.0		
8X-4 コミュニケーション	(人)	31	25	6	0	0	0	平均値 3.8	3.7
	(%)	100.0	80.6	19.4	0.0	0.0	0.0		
9X-5 教員の意欲・熱意	(人)	31	26	5	0	0	0	平均値 3.8	3.7
	(%)	100.0	83.9	16.1	0.0	0.0	0.0		
10X-1 授業の選択	(人)	31	6	13	7	5	0	平均値 2.6	2.8
	(%)	100.0	19.4	41.9	22.6	16.1	0.0		
11X-2 出席状況	(人)	31	11	15	5	0	0	平均値 3.2	3.5
	(%)	100.0	35.5	48.4	16.1	0.0	0.0		
12X-3 あなたの態度	(人)	31	10	20	1	0	0	平均値 3.3	3.1
	(%)	100.0	32.3	64.5	3.2	0.0	0.0		
13X-4 授業時間外学習	(人)	31	2	4	9	16	0	平均値 1.7	1.6
	(%)	100.0	6.5	12.9	29.0	51.6	0.0		
14X-1 改善度	(人)	31	19	11	1	0	0	平均値 3.6	3.5
	(%)	100.0	61.3	35.5	3.2	0.0	0.0		
15X-2 目的・目標達成度	(人)	31	17	14	0	0	0	平均値 3.5	3.5
	(%)	100.0	54.8	45.2	0.0	0.0	0.0		
16X-3 満足度	(人)	31	23	8	0	0	0	平均値 3.7	3.7
	(%)	100.0	74.2	25.8	0.0	0.0	0.0		
17X-1 自由設問	(人)	31	4	27	0	0	0	平均値 3.1	3.1
	(%)	100.0	12.9	87.1	0.0	0.0	0.0		
18X-2 自由設問	(人)	31	16	14	1	0	0	平均値 3.5	3.4
	(%)	100.0	51.6	45.2	3.2	0.0	0.0		



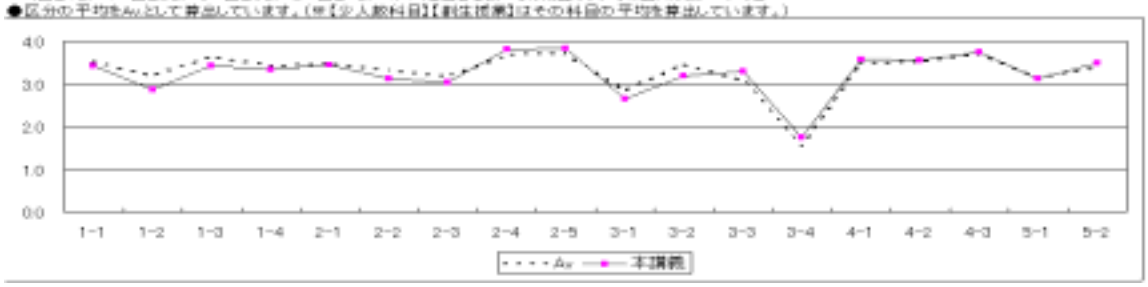
※平均値について

●問1-1から問5-1の回答1から回答4を、下記のとおりポイント化し算出しました。

回答1(++)4ポイント、 回答2(+) 3ポイント、 回答3(−) 2ポイント、 回答4(−−) 1ポイント

(回答1数×4＋回答2数×3＋回答3数×2＋回答4数×1)÷(全回答者数－その問題について未記入の数)＝平均値

●区分の平均をAvとして算出しています。(※【少人数科目】【創生授業】はその科目の平均を算出しています。)



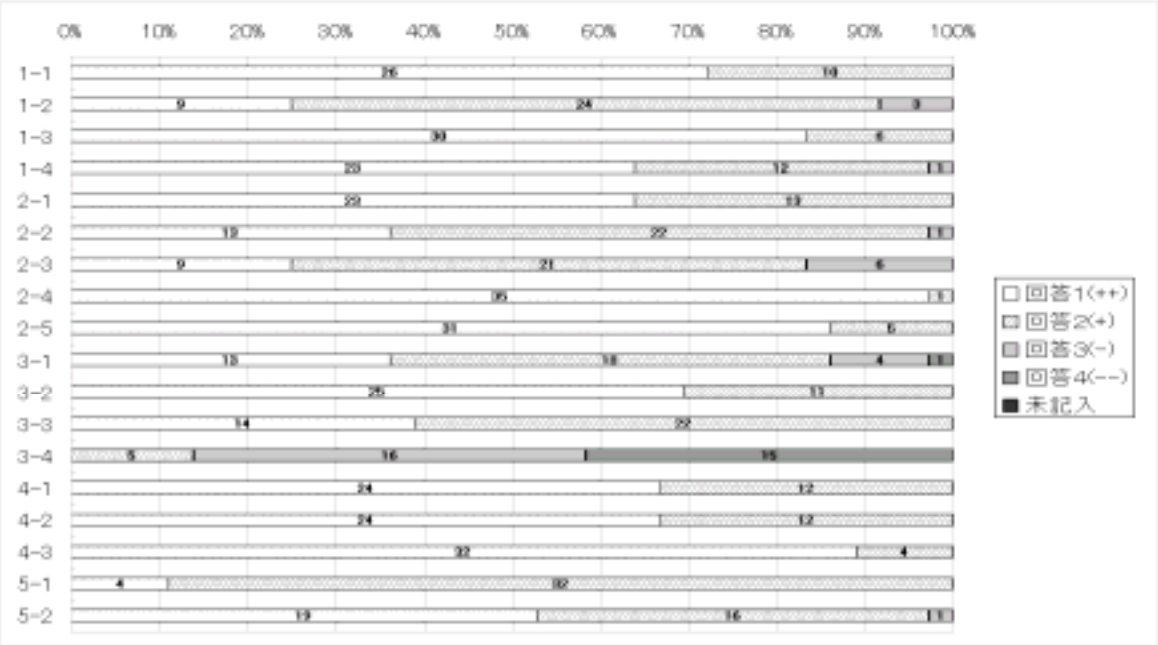
愛媛大学　　平成18年度前学期授業改善のための最終アンケート集計表（科目別）

教養科目、30の関門科目　（生活と制度）　創生授業　18問

科目番号　262 受講者数　36 回答者数　36 回答率　100.0%

科目名　くらしと政治

		合計	回答1（++）	回答2（+）	回答3（−）	回答4（−−）	未記入	本講義	創生授業 Av.
1次-1 目的・目標提示	(人)	36	26	10	0	0	0	平均値 3.7	3.5
	(%)	100.0	72.2	27.8	0.0	0.0	0.0		
2次-2 進度・時間配分	(人)	36	9	24	3	0	0	平均値 3.2	3.2
	(%)	100.0	25.0	66.7	8.3	0.0	0.0		
3次-3 関心・興味	(人)	36	30	6	0	0	0	平均値 3.8	3.6
	(%)	100.0	83.3	16.7	0.0	0.0	0.0		
4次-4 シラバスどおりの授業	(人)	36	23	12	1	0	0	平均値 3.6	3.4
	(%)	100.0	63.9	33.3	2.8	0.0	0.0		
5次-1 わかりやすさ	(人)	36	23	13	0	0	0	平均値 3.6	3.5
	(%)	100.0	63.9	36.1	0.0	0.0	0.0		
6次-2 教科書・プリント	(人)	36	13	22	1	0	0	平均値 3.3	3.3
	(%)	100.0	36.1	61.1	2.8	0.0	0.0		
7次-3 視聴覚教材	(人)	36	9	21	6	0	0	平均値 3.1	3.2
	(%)	100.0	25.0	58.3	16.7	0.0	0.0		
8次-4 コミュニケーション	(人)	36	35	1	0	0	0	平均値 4.0	3.7
	(%)	100.0	97.2	2.8	0.0	0.0	0.0		
9次-5 教員の意欲・熱意	(人)	36	31	5	0	0	0	平均値 3.9	3.7
	(%)	100.0	86.1	13.9	0.0	0.0	0.0		
10次-1 授業の運営	(人)	36	13	18	4	1	0	平均値 3.2	2.8
	(%)	100.0	36.1	50.0	11.1	2.8	0.0		
11次-2 出席状況	(人)	36	25	11	0	0	0	平均値 3.7	3.5
	(%)	100.0	69.4	30.6	0.0	0.0	0.0		
12次-3 あなたの態度	(人)	36	14	22	0	0	0	平均値 3.4	3.1
	(%)	100.0	38.9	61.1	0.0	0.0	0.0		
13次-4 授業時間外学習	(人)	36	0	5	16	15	0	平均値 1.7	1.6
	(%)	100.0	0.0	13.9	44.4	41.7	0.0		
14次-1 関心度	(人)	36	24	12	0	0	0	平均値 3.7	3.5
	(%)	100.0	66.7	33.3	0.0	0.0	0.0		
15次-2 目的・目標達成度	(人)	36	24	12	0	0	0	平均値 3.7	3.5
	(%)	100.0	66.7	33.3	0.0	0.0	0.0		
16次-3 満足度	(人)	36	32	4	0	0	0	平均値 3.9	3.7
	(%)	100.0	88.9	11.1	0.0	0.0	0.0		
17次-1 自由設問	(人)	36	4	32	0	0	0	平均値 3.1	3.1
	(%)	100.0	11.1	88.9	0.0	0.0	0.0		
18次-2 自由設問	(人)	36	19	16	1	0	0	平均値 3.5	3.4
	(%)	100.0	52.8	44.4	2.8	0.0	0.0		



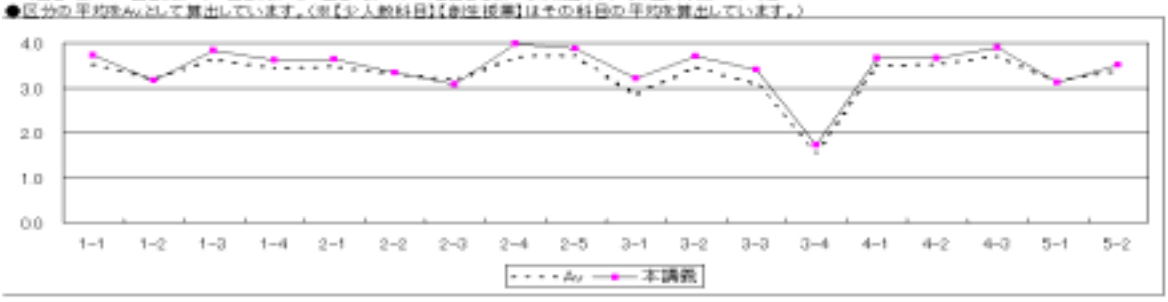
※平均値について

●問1-1から問5-1の回答1から回答4を、下記のとおりポイント化し算出しました。

回答1(++)4ポイント、　回答2(+)　3ポイント、　回答3(−)　2ポイント、　回答4(−−)　1ポイント

（回答1数×4＋回答2数×3＋回答3数×2＋回答4数×1）÷（全回答者数－その問題について未記入の数）＝平均値

●区分の平均値Avとして算出しています。（※【少人数科目】【創生授業】はその科目の平均を算出しています。）



【中間期の振り返り】

科目番号260
学生コメント
教育方法
グループで話し合い発表することで他のグループの意見を聞くことができ，考え方の違いを見つけてよかった(2)
GWなので退屈しないでよい。
ディスカッション形式で自分の言いたいことを言える
GWは普通より楽しい
班活動でコミュニケーションのできる場を作っていること
全員が積極的に講義に参加できるような形式で行っていること
GWで，グループで発言するには積極性が必要だが，先生は教室内をアクティブに動き回り，各グループの様子を見たりして学生の積極性をうまく引き出していた
GWのときにいつも熱心に歩き回り各班の討論に参加する
時々，意見に悩んだらアドバイスをしてくれるのでいい。
ビデオ視聴を取り入れた授業はとても分かりやすい
話し合いが進んでいないグループがあったらもう少し手を差し伸べてほしい。
グループ作業の前に簡単なアイスブレイクが欲しい
ゼミ生(アシスタント)がいる意味を感じない。ゼミ生ももっと参加するようにしたらどうか。
授業内容
わかりやすく説明してくれた
難民問題について自分で調べるような授業展開(ただ聴くだけではなく)
学生自らに考えさせようとするところ
答えがでないこと(明確な答えがないものに対して，討論していくことは面白い)
もう少しわかりやすく説明してほしい(専門的で日常的にあまり考えないことなので)
授業の雰囲気
「どんなことでも言ってくれてもかまいません。」「人の意見を聞いてください。」
「個人の意見を尊重することが大事である」
何を言っても受け入れてもらえるので意見が出しやすい，開放感があっていい(6)
授業の雰囲気が楽しい
自分たちで自由に討論を進めていくことを許してくれている姿勢
明るい意見を言いやすい雰囲気
ディスカッションに慣れていない学生が多い。ディスカッションの仕方を教えてほしい
教員の熱意・人柄
学生が授業に対して積極的になるように努力している。
学生の発言に対し責任を持って対処している。
先生が面白い人でコミュニケーションをたくさん取ろうとする
先生が時々面白いことを言う(3)
先生がいろいろ声をかけてくれるので楽しい。
本人が結構一生懸命だからこっちもやる気が下がることはない
教員の熱意・人柄やわらかな口調，態度(3)
腰が低いので嫌な気がしない
熱く語っていた
時々面白くないギャグがある
もう少ししっかりしてほしい(指示等)
出席・時間管理
授業の時間配分がいつも遅れ気味になるため最後の発表(重要なところ)が適当になる点(5)
時間配分どおりに授業が進まないので，最初から書かなくていい。
時間配分とできるだけ同じにした方がけじめがつく。
ミニミニレポートを書く時間が少ないので十分に考えたことがないので，もっとゆとりをもった時間配分でやってほしい。(2)
意見の発表の際は時間制限をしたほうがよいのではないか
担当コンサルタント：佐藤浩章 ©愛媛大学教育・学生支援機構 教育企画室

科目番号262
学生コメント
教育方法
ビデオ等の資料を活用し，わかりやすい授業。実際に自分の目で見て印象に残り難民問題についてもっと学びたいと思った(6)
進行プリントを配っている点(2)
授業の流れを始めに説明してくれるので次に何をするのかがわかりやすい
班ごとに皆で話し合って授業をすすめるからいろんな意見を聞ける(6)
一人ひとりがきちんと参加できる，人まかせで頭を使わない授業になりにくい(2)
自分たちの意見に対して，他のグループの意見も聞けたりするし，先生自身の意見も聞けるので，ああこういう考え方もあるんだと感じることもあって良い。別の班の人に意見を言わせることで他の発表をしっかり聞くようになったからこの制度は良い(2)
グループの話し合いの際に助言をしてくれる(3)
テーマが難しいときはヒントを出してくれたから助かった(3)
グループを回って助言してくれるので質問をしやすい
クイズ形式にしたり工夫してくれるから授業が面白い
声が大きく聞き取りやすい
どのグループにも必ず意見を言ってくれる
どんな発言をも認める寛容さ(3)
小さな意見を見逃さずにとりあげて説明してもらった，いいところを探そうとしてくれている
質問をしたらしっかり答えてくれた
学生が上手く発表できないときに学生の気持ちをくみとり先生がうまくまとめてくれて授業を円滑に進めてくれる
学生の意見をとりあげる
先生の指示がとてもわかりやすい，指示がてきぱきしているので90分があっという間(2)
話し合うべきところを明確にしてくれる
講義というよりも，中高の「授業」のような感じがありなじみやすい
先生からこちらに意見や質問をしてくださる
最初に名前プレートがあったのは良かった
話しかたを改善したほうが伝わりやすいのではないか(滑舌)
ビデオをスクリーンに映すのにとても手間取っていた点
授業内容
授業の主旨がわかりやすい
補足説明もわかりやすい(2)
先生自身の意見が素晴らしい
知識を広げるばかりではなく，写真から意見を感想を言うのも面白い
長期休みに短時間で調べられる課題を出してくれたこと→学習内容がはっきりしてよかった
結論というかまとめが曖昧な部分があり，後から授業を振り返りにくい。時々何を学んだのかわからないときもある。
せっかくの難民に関する授業なのでもう少し知識的なものを教えたり話したりしてくれてもいいのではないか。
授業の雰囲気
重い雰囲気ではなく明るく軽い雰囲気，和気藹々とした雰囲気(3)
自由に意見を言える雰囲気(2)
「皆でワイワイ，ガヤガヤ授業をやっていきたいと思います」と言われたのは良かった
発表量が多かったので誉められた。その時は考えを出した甲斐があったと思った(2)
毎週この授業を期待しています。この授業が一番楽しい(2)
少人数グループなので意見を出しやすい(5)
みんなが発表したことに必ず「いいですねー」と言ってくれる。どんな発言でも肯定的に言ってくれる。私の意見に「いいかもしれないと」誉めてくれた(3)
人の意見に流されやすそうな感じがする
教員の熱意・人柄
明るく親しみやすい(3)
先生の笑顔でやる気が出ます
難民問題に対する熱意，難民について一生懸命説明してくれる姿勢がこちら側を刺激してくれた(2)
優しい感じがする
フレンドリー
人間味にあふれている
積極的に話しかけてくれる，先生とのコミュニケーションがとりやすい(4)
上から目線ではなく常に学生と同じ目線で向き合ってくれている
こちらの意見を興味深そうに聞いてくれる，話を真剣に聞いてくれている気がする(3)
話しかたにユーモアがあって授業を受けていて楽しい
うなづいてくれる
細かいところまで気にしない
やる気を感じる
出席・時間管理
時間どおりにいきそうにないとき，あせっているのでせかされている気がするときがあった(3)
いつも感想を書くことができない
計画に少し無理がある気がするときがある
担当コンサルタント　佐藤吉章　※愛媛大学教育・学生支援機構　教育企画室

科目名：芸術の世界　　*授業題目：眼差しの共有*
担当教員：松久　勝利（教育・学生支援機構）
受講者数：２６名

Ⅰ 授業題目　　眼差しの共有―ワンランク上の美術理解のためにー
Ⅱ 履修者数　　２６名
Ⅲ 重視した教育目的
絵画芸術の初歩的な鑑賞法を身に付け、人間の創造的な文化の営みに、自らの感性を通して参加できる。

Ⅳ 設定した到達レベル
①画面に即した絵画理解の導入的技法の意味を知り、実践できる。
②協同して事にあたることを通じて、社会的技法を身に付ける。
③問題を見つけ、その解決に向けた調査、分析、討論、まとめ、プレゼンテーション、レポート作成法等、基本的なスタディスキルの導入段階に対応できる。

Ⅴ 授業を進めるにあたって留意した事柄
①答が一律ではない問題へのアプローチすることの楽しさを経験してもらう。
②社会的技法が育っていない段階で、いかに円滑に協同学習に入ってもらうか。
③「感性」に関わる授業の評価法を開発するため、学生による自己評価と相互評価の運用テストに取り組む。

Ⅵ 学生の反応（上記Ⅴに即して）
①についてはおおむね良好な反応であった。絵画鑑賞は本来的にパーソナルな作業である。そうであるがゆえに学生は、自分と他者、自分のグループと他のグループの理解の違いを前向きに楽しんでいた。
②今期は法文夜間主が対象であったが､授業開始時にはコミュニケーション能力が身についていない学生が目立った。そこでグループ討論にあたり、司会役、発言役、コメント役、うなずき役を割り振り､それぞれの役割を順次ローテーションで経験してもらうという手法をとってみた。早い時期に、どのグループでも誰かが思いがけない意見を言うという場面があり、おーというどよめきが一度出ると、その後は意見がどんどん出てきて、良い雰囲気が形成された。最後は自分たちでしっかりと連絡を取りながら調査等に取り組めるようになり､まずはうまくいったように思われる。
③学生による成績評価の問題点は、個人により甘すぎたり、厳しすぎたりというムラが生じる点にある。これについてはまだまだ課題が多く、新たな工夫が必要な段階である。

Ⅶ 総合的に見て、うまくいったかどうか
大方の学生にとり絵画鑑賞への本格的な取り組みは初めての経験であり、ピア・ラーニングを通してそれぞれの感性に向き合う作業は大きな刺激になったようだ。学生の授業評価で言えば、「関心・興味」や「満足度」は４ポイント中 3.8 ポイントであり、ほぼうまくいったと評価してよいだろう。また課題だった授業時間外の学習は、前年 1.8 から 2.4 と向上している。むろんこれでもまったく不十分だが、グループ学習を軌道に乗せることで、授業時間外の学習にも取り組む傾向が出てくることが確認された。

Ⅷ 今後に向けた改善点
・グループワークの活性度をさらに高いレベルにもっていくための工夫。
・学生による自己採点のありかた。
・時間外学習の設計。

科目名：自然の法則　　*授業題目：暮らしの中の不思議発見*
担当教員：細田　宏樹(教育学部)
受講者数：２１名

〔授業題目〕　暮らしの中の不思議発見 (The Wonderful Discovery in the Living)

〔履修者数〕　法文学部 3 名，教育学部４名，工学部 14 名 の 計 21 名

〔重視した教育目的〕
“暮らしの中でふと感じる疑問”の一つ一つを解決するために，調査，発表，討論を行う．その過程を通して，自然現象に対する誤った知識・理解を正し，学問探求に必要な“問題解決能力”を高める．

〔設定した到達レベル〕
発表者については，自らが選択した“一つの疑問”について，文献調査などを通して知見を得て，その要旨を文書にまとめて発表し，討論により受講生全員の知恵を結集して，答えを導くことができることとした．一方，聴衆については，他の受講生が調査し，発表した知見について，理解するための努力を行い，実際に理解できることとした．

〔授業を進めるにあたって特に留意した事柄〕
質疑応答や討論を活発にするために，発表者が質問に答えられなかったときには，次回までに調べてくるという課題は出さず，得意な人・分かる人が遠慮せずに発言し，発表者を支援するようにさせた．このことで，「自分の発表の時に質問されたら困るから，他者にはできない．」という遠慮がなくなり，学生たちは互いに気兼ねなく発言できた．
教員は，聴衆の一人として聞き役になって，学生と対等な立場で討論に加わるよう心がけた．さらに，2001 年度から行い，シラバスにも明記しているが，定期試験問題の正解は，教員が提案し，授業での討論をふまえて発表者が決定することとした．その理由は，教員の考え・常識の押し付けでは，学生は納得しないまま言われたことを暗記するしかないので，問題解決にはつながらない．私は学生同士の討論を通して，仮説の真偽を見極め，正解に導かせたいと考えている．

〔学生の反応〕
興味・関心があり，知りたいことなので，受講態度は良好である．そのことは，「この授業は楽しくて，時間がたつのが本当に早いです．」，「何でもないことを調べてみたときの，ちょっとした嬉しさがこの授業にはある．」という学生の感想からも示唆される．
気兼ねなく質問できるので，発表の質疑応答が活発になった．質問は多くの学生がするが，討論に加わる学生は少なく，一部の学生に固定化した．しかし，「出席カード」には討論の内容をふまえ，自分の意見をしっかり述べている学生が多いので，教育目的は達成されていると考えられる．

〔総合的にみてうまくいったかどうか〕
第一に，勉学意欲の向上がみられる．1 回生の受講継続率は，2003，2004 年度に引き続き今回も含めて，3 回連続で 100%である．今回は特に，すべての受講登録者が最後まで受講した．「物理は難しい・苦手・分からない」と言う学生であっても，「学ぶことを楽しい，知ることを嬉しい」と感じ，学ぶことに前向きに取り組む姿勢がみられた．
第二に，問題解決能力の向上がみられる．発表・討論においては，事実，仮説，直感を区別して発言できるようになってきた．一方，「出席カード」においては，質疑応答・討論をふまえて，自分の意見を論理的に述べることができるようになってきた．
第三に，定期試験の成績が予想以上に良く，授業をしっかり聞いて理解していたことが窺える．
最後に，学生による授業評価アンケートの結果も良好であり，本授業は総合的にみて，うまくいったと考えられる．

〔今後に向けた改善点〕

まず，全員参加の討論の実現である．「出席カード」への記載による意見表明を，どのようにして，口頭での意見表明に変えていくか，考えていくことが必要ではないかと思われる．

次に，授業評価アンケートで約 80%の学生の授業時間外学習時間が（－－）の評価，即ち授業１回あたり 30 分未満であるという点である．その主な原因は，学生１人あたりの発表数が１回であったことに起因する．発表が１回しかないにも拘らず，文献調査の不十分な学生が数名いて，彼らの発表では，情報量の少なさが原因で，討論が行き詰った．そのことから，文献調査に対する指導を徹底し，場合によっては解説をきちんと作らせる働きかけも必要ではないかと思われる．

〔愛媛大学の学生に学ばせたい教養テーマ〕

情報・持論を吟味する能力を育成する授業が必要ではないかと思われる．それは，プレゼンテーション技術・ディベート技術よりも先行させて授業を実施する必要がある．たとえば自然科学の分野なら，明らかに間違っている情報・持論を正しいものと思い込んでは，学生自身の知識獲得の妨げになる．さらに，何も知らない他者に対しても，間違っている情報・持論を，自信満々で分かりやすく説明するだけならまだしも，ディベート技術を駆使して納得させようとすることは，無意味なことであると思われるからである．

また，オープンエンドの課題を扱う授業も必要ではないかと思われる．世の中には，未知のことがたくさんあること，そのことを順々に一つずつ解明していくためには事実，仮説，直感を区別して扱わなければならないことを，知っていなければならないからである．そして，解明していくための方法論を体験し，分かったところまでの成果をまとめる方法も知っておく必要があると思われる．

科目名：ことばの世界　　*授業題目：理系学生のための日本語ラーニング*
担当教員：清水　史(法文学部人文学科)
受講者数：２９名

対象学生　知の展開科目Ａ　受講者数：２９名（法文３名、理８名、医７名、農 11 名）

□授業題目
　理系学生のための日本語ラーニング

□重視した教育目的
　日本語の様々な特性を理解することによって、科学を記述するための日本語の適正な使い方を習得する。

□設定した到達レベル
　シラバスに掲げた＜到達目標＞は以下の通り。
（１）レポート作成や口頭発表のプロセスを的確にイメージ、デザインすることができる。
（２）所与の課題を達成する中で、論理性と批判的思考力を養うことができる。
（３）情報収集とリソースの組み立て方を身につける中で、自己の意見を確立することができる。
（４）達意の文章を作成する極意と口頭発表のコツを習得することができる。

□授業を進めるにあたって特に留意した事柄
（１）受講生確定の２回目の授業の最初と１５回目の最後に同じ日本語力試験を実施し、その回答状況を比較し、授業の成果を分析した。
（２）ピア学習が効果的に行われるよう６班編制にした。
（３）日本語の基本と特徴が理解できるようなビジアル教材を作成し活用した。

□学生の反応
最終回に授業で印象に残ったところを記述してもらったので紹介したい。

▼グループ・ワークについて

・グループで話し合うことが多く、意見が出せた。知らないことも多く、学べて良かった。笑いもありかた苦しくなく受けることができた。(理)
・グループ・ワークで他学部の人と交流できて楽しかったです。また、自分の書く文章がいかにあやしいかを再確認できて、とてもよい経験になったと思います。(医)

清水コメント：＜ことばの問題＞について考えるには、一人でなく複数人でコミュニケーションを行うことが特に効果的です。<u>日本語を意識化、対象化させることができる</u>からです。

▼授業の効果

・日頃使っている日本語の概念がくつがえされました。とてもおもしろかったです。自分の日本語力の乏しさを思い知らされました。(法)
・これからレポートを書いていく中で、論を進めていく順番が分かりました。また、自分の論を要約してみて、言っていることにスジが通っているのかを確かめる方法も知りました。(法)
・日本語の文章を書くことだったら、ほとんどできると思っていたけど、この授業をうけて日本語は奥が深いと思った。
・文章をきちんと書きたいと思っていたので、ルールが分かってよかった。(理)
・いままで、自分の日本語の感覚に頼っていたところを、論理立てて考える方法わかり、安心した。(理)
・私は、1つの文章になるべくたくさんの言葉を入れていく方がいいと思っていたのですが、わかりやすい文章にはなるべく短い文の方がわかりやすいということがわかってよかったです。(理)
・授業を通して、普段おろそかにしていた句読点の大切さを改めて知るとともになに気ない文章にも気をつけるようになりました。(医)

・今まで国語が苦手だったのは、文章から要点を絞り出したり、自分で文章を構成するのが苦手だったからだとこの授業を通して感じました。今後のレポートやプレゼンで生かすことができれば と思います。(医)
・文献引用の方法、書き方が分かったので、これからのレポ作成に役立てたいと思います。(医)
・日本語にもいろいろなルールがあると学びました。(農)
・日本語について学ぶ機会はほとんどなかったので、今回学ぶ機会をいただくことで、日本語に興味を持つことができました。(農)
・今までは文を長く書いてしまっていたが、これからは短い文を書くよう心がけようと思う。(農)
・いつも何気なく読んでいる文章に、こんなにルールがあるとは思ってませんでした。発表時の視線の動かし方も知ることができてよかったと思います。
・レポートの書き方など、これから役に立つことを学べたのでよかった。(農)
・理系なのでこれまであまり気にしていないことに触れられてかった。

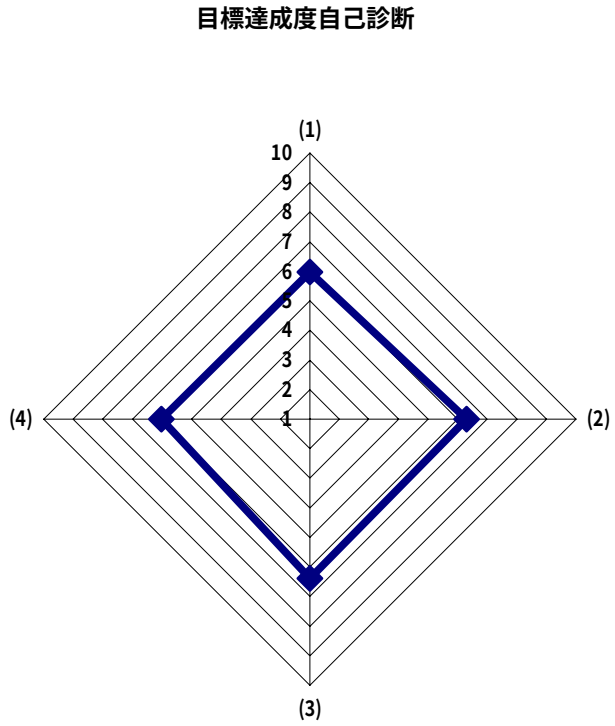
▼授業への要望

・もう少し、実践の時間と、文章の読み取りを勉強したかった。センター試験の国語が全然だめだったので。(理)

▼その他

・聞いていると理解できていても、例題をやってみると、かなり難しかったです。要約は全然まとまらなくて大変でした。(理)
・わかりやすくて、先生の声が聞き取りやすかった。(農)
・難しかった。でも今後レポートを書くときや、口頭発表のときに今回学んだことを参考にしようと思う。(理)
・とてもおもしろくまたうけえたいです。(理)
・朝1限ではなく昼3限なら…と悔やんでしまいます。(医)
・毎回勉強になることが多く、有意義な授業でした。
・講義名通り、先生の話し方がしっかりなさっていて、とても聞いていて、苦にならない授業でした。私はこれからプレゼンや対話といった機会の増える立場にあるので、少しでもこの授業の内容を活かしたいと思って先生のステキさが印象に残ってます。(医)
・月曜1限ということもあり、頭が寝たままで半分くらいしか内容をちゃんと理解できていない気がして残念だ。
・内容のレベルが自分にとっては少し難しかった。しかし、習ってすぐは「なるほど！」と思うことが出来るので、実践できるようにしたい。(農)
・日本人と外国人の文の捉え方の違いもおもしろかったです。(農)
・日本語の特性と論理的展開のつながりがよく見えませんでした。(農)
・先生が、パソコンを使ってわかりやすく説明をしてくれてとてもいい授業だったと思う。(農)

□総合的にみてうまくいったかどうか
シラバスに掲げた４つの＜到達目標＞のそれぞれについて、受講生２７名（２名欠席）に、１０満点で自己診断してもらった結果の平均点は次の通り。



<到達目標>
（１）レポート作成や口頭発表のプロセスを的確にイメージ、デザインすることができる。

（２）所与の課題を達成する中で、論理性と批判的思考力を養うことができる。

（３）情報収集とリソースの組み立て方を身につける中で、自己の意見を確立することができる。

（１）～（４）全体の平均点は6.16点。それぞれの目標に対して約６割方の点がついている。高得点の自己診断もあれば低得点の自己診断もあり、全体的にはまずまずの成果といえるのではなかろうか。「日本語ラーニングの上級編があったら受講したいと思うか」の問いかけに２５名が Yes と答えていた。No と答えた分については、「もっと基礎学力を身につけてから」受講したいとの但し書きが添えられていた。こうした日本語科目に対する要求の強さが窺われよう。

□今後に向けた改善点
　努力目標としての具体的・物理的改善点は、１）ピア学習の効果をもっと引き出せるような方法を開発、２）分かりやすいビジアル教材の開発等々いくつでもあげることができるが、日本語ラーニングのようなスキルを習得させる授業に関しては、実施にあっての前提を確認することが必要なのではないかと考える。
　今回は、新たに、受講生が確定した２回目の授業の最初と最終回に、同じ問題の日本語力測定試験の実施を試みた。カカリ・ウケを中心とした日本語表現の基礎的な構文問題である。その結果は、本講義受講前と後とでは明らかな違いが認められた。構文の諸スキル習得後は、どこが訂正されるべき箇所であるかが、受講生にはっきりと認識されている結果が出た。当然といえば当然であるが、問題は、受講前の学生の日本語力の実態である。やはり、入学後、英語と同じように日本語運用能力測定試験を実施し、個々人の資質を見極めておく必要を痛感する。

科目名：異文化へのまなざし　　*授業題目：共生世界で暮らすために*
～留学生支援を題材として～

担当教員：村上　和弘(国際交流センター)
受講者数：２９名

1．　授業題目：『共生世界で暮らすために --留学生支援を題材として--』(異文化へのまなざし)

2．　履修者数：29 名

3．重視した教育目的

本科目の目的は、異文化理解・多文化共生という主題を「自らの問題」として捉え、理解するための視点を獲得することにある。「異文化理解」や「多文化共生」の語は、近年メディアに登場する機会も多く、学生にとっても、ある程度は耳慣れた言葉であるだろう。だが、耳慣れたテーマ＝身近に感じるテーマ、とは限らない。学生の話を聞く限り、むしろ自らの生活空間から離れた場所でのできごと、と捉えられている節がある。そこで、「留学生支援」という比較的身近で、かつ接近可能な具体例を通じ、上のテーマについて考察する機会を提供したいと考えた結果、本科目の開設に至った次第である。

したがって、教育目的としては、留学生支援に関する概要の理解および基本的な知識の習得、そしてそれらに基づいて自己の意見を形成し、言語化すること、に重きを置いた。とくに重視したのは、後者の、意見形成および言語化である。これらの目的達成のため、授業はグループワークを中心に、議論と対話の機会を積極的に組み込んだ。

4．設定した到達レベル

- 日本語教育を含む、留学生支援に関する概要を理解する。
- 日本語教育を含む、留学生支援に必要な最低限の知識を習得する。
- 留学生支援に関する諸問題を「自らの問題」として捉えなおし、翻って自己・自文化・自社会のあり方について再検討する。

5．授業にあたり特に留意した事柄

「留学生支援」あるいは「多文化共生」という題材は、それが対象指向型のテーマだけに多様なアプローチが存在する。本科目も、複数の教員が交代で各回を担当するオムニバス風の構成をとった。そこで、全体像を常に意識しながら授業が行なわれるように留意した。教員に対しては開講前に充分な打合せを行ない、全体像を意識しながら個々の回を担当できるよう努めた。一方、受講生に対しては、毎回の開始時に、全体像のなかでの位置付けを説明した後、授業を行なうようにした。さらに、コーディネータ役の教員はできる限り毎回授業に参加し、進行状況の把握と微調整を行なった。

教室活動においては、グループワークが単なる「作業」とならぬよう、作業課題は、対話や議論が必要になるように設定した。対話を活性化させるため、1 回の授業において複数の作業課題を出し、また、グループ内/グループ間、そして教員を交え全体での意見交換と、位相を変えての意見交換を行なうようにした。

6．学生の反応

全体的には肯定的であった。詳しくは「授業評価アンケート」を参照されたい。ただ、授業担当者の実感としては、グループワークや議論の際、積極的に参加する学生と、そうでない学生との落差が顕著であったように感じられる。また、全体発表の際、質疑応答が予想よりも低調であった。

実は、2005 年度に、同様の内容を連続公開セミナとして開催したことがある。その際はグループワークでの積極性、全体発表での質疑、ともにきわめて活発なものであった。今回の「創生授業」担当にあたり、受講対象の違いなどを考慮し、事前に充分な修正を加えたつもりであったが、それでも予想とは異なる面が多く、再修正にやや時間を要した。

両者とも、受講生の「気づき」は確実に得られている。問題は、その頻度に差があった点であろ

う。「気づき」のサインを見逃さず、確実に育てること、および担当教員が交代しても確実に情報が引き継げるようにすることが課題であろう。

8．総括および今後の改善点

受講学生の回答を見る限り、一応水準点には達しているものと思われる。また、このようなテーマでの開設科目はおそらく他にはなく、その点でも価値はあると思われる。一方、授業の運営方法、内容等はさらに改善する必要がある。まず、受講者層に合わせてのレベル再調整は、より速やかに行なう必要があるだろう。また、議論を活性化させる方法、特に全体発表における方法はさらに検討する必要がある。また、成績評価の方法も再検討を要する。各回の成績＋最終発表の成績で判定したが、各回ごとの判定基準のすり合わせが不足だったように思う。

9．愛媛大学の学生に学ばせたい教養テーマ

世界の多様性への認識、「違い」を知ることの面白さ

科目名：雑学のすすめ　　*授業題目：松山氏の都市環境と自然*
担当教員：寺谷　亮司(法文学部総合政策学科)
受講者数：１２名

- **授業題目**：松山市の都市環境と自然

- **履修者数**：１２名：希望者多数であったため，抽選で１５名としたが，３名は履修せず。

- **重視した教育目的**：重視した目的は下記２点である。
  第１は巡検（野外実習）によって、実際に地域を観察・調査することによって、松山市の風土に関する知見を深めるとともに，地域を観る眼を養うことである。
  第２は、通常の演習時を通じて、調査テーマに関する調査方法、発表方法、討論方法を学ぶことである。

- **設定した到達レベル**：
（１）あるテーマに関して、文献サーヴェイを実施し、調査成果をレジュメを基に発表する。
（２）新鮮な目で地域を観察し、また簡単なフィールド調査を実施する。
（３）フィールド調査成果を報告し，その成果について討論する。

- **授業を進めるにあたって特に留意した事柄**：訪問地域に関する事前調査成果の発表，巡検および現地調査，調査結果の報告の，３時間でワンセットの授業編成を行った。また，学内演習時は，ほぼ全員に自分の考えや意見を述べさせた。

- **学生の反応**：大学の近くでも知らなかった興味深い場所に行けた，同じ現象を見ても人によって全く異なる印象をもつことなどを発見できた，などの印象を持てたようである。

- **総合的にみてうまくいったかどうか**：学生の授業評価も良好であり，うまくいったと思うが，その背景として，学習意欲のある元気な学生が集まったことが指摘できる。

- **今後に向けた改善点**：この授業内容や授業の進め方では１５人以下程度が限界であり，これ以上の受講学生がいた場合の方法を考える必要がある。また，わずか９０分での巡検はかなり困難であり，今回は授業開始時刻に現地集合とした。

- **愛媛大学の学生に学ばせたい教養テーマ**：愛媛・松山の風土，第三世界の国々と私たちの関わりなど

科目名：地球を考える　　*授業題目：大地の歴史を考える*
担当教員：山﨑　哲司(教育学部)
受講者数：１６名

昨年度に引き続き，「サイエンス体験科目」を実施した。主として文系の学生を対象とした，実験を交えながら授業を進め，科学に親しみ，科学的な考え方を理解してもらうことを意図して設けた科目である。今年度は後期の金曜２限に授業を行った。ただ，夏頃に気づいたのだが，後期の金曜は，日本教育大学協会の研究集会が開かれるため，休講をする必要があり，都合の悪い曜日であった。職務上，授業と同等に重要な会であるため，全国集会と四国集会の２回について休講とし，２月にその補講を行った。また，祝日や大学祭の関係で，初回・*研究集会（全国）*・２回目・３回目・*祝日*・*大学祭*・４回目・５回目・*研究集会（四国）*．．と，前半はひどい細切れ状態になってしまった。やむを得なかったとは思っているが，担当決定の時期に日程を考慮して，曜日の調整をお願いすべきであったと反省をしている。

授業の初回に，こうした事情を説明し，最後の回が２月の半ばになることを話したところ，途中で別の教室へ向かった者も数名以上出た。最終的に，受講者数は１６名と少なかった。内訳としては，法文学部生３名，教育学部生８名，工学部生５名となり，昨年度よりも理系の学生の割合が高い状況で行うことになった。

授業の中で行った主な実験としては，城山における地層の観察（第３回），砂の分析と観察（第５回，６回），紡錘虫化石の観察（第 11 回）である。また，その他の回の大部分についても，地質時代の代表的な大型化石を講義室へ運び，順番に回して観察をさせながら講義を行った。今年度は，昨年度の授業で扱った，化石や岩石から地球の歴史がどうして分かるのか，どのようなことを手掛かりとして，大地の歴史を読み取るのか，という地学（地史・古生物学）の基本となる考え方を伝えることとともに，地球の歴史と生物の変遷についても概略を話した。

昨年度の報告で述べたことと重なるが，この授業では（基礎的な）専門知識の獲得を目的にはせず，また恐竜など多くの学生に関心が高いと思われる項目をトピック的に話す，ということもしていない。どちらかといえば地味な話であり，遠い過去の地球の歴史をどのようにして推測しているのか，どのようなことを手掛かりとして，大地の歴史を読み取るのか，という，地学（地史・古生物学）の基本となる考え方を伝えることを試みている。「現在は過去の鍵」であり，現在を知ることが過去を知る手掛かりであることを，実験や観察を通じて伝えるよう努めた。

前半の授業が細切れになってしまったことがあり，話のつながりを作りづらかったという思いが授業者側にあるが，間が空いたことにより，実験で使う材料の準備には都合の良い点があった。岩石（堆積岩）からどのようなことを知ることができるのか，という例として，現在の河川や海岸などに見られる砂を採取し，環境による違いを調べる，という実験を行っているが，より意欲的に作業を行うため，受講生に身近な場所の砂をとってくることを勧めている。昨年度は１名のみが呼びかけに応じてくれたのだが，今年度は祝日・大学祭のため，１１月最初の金曜の授業が２回連続して休講となったためか，７名がいろいろな場所で砂を採取してきた。また，第５回に砂の実験を行ったが，翌週の金曜には鳴門教育大学で研究集会が開かれた。この帰りに，鳴門の海岸および吉野川の河口で砂を採取し，第６回に行った砂の分析に利用した。河川といっても，重信川・石手川と吉野川では河川の長さ・流域面積や水量に大きな違いが存在する。そのため，河口の砂についてもその特徴には明瞭な違いが見られる。”怪我の功名”といった面があるが，環境（堆積環境）による砂の違いを知るためには，非常によい試料となった。最終試験の記述を見ても，河川による砂の違いが，多くの学生の印象に残ったようである。

砂の中には，植物の破片や貝殻の破片など，生物体に由来するものも含まれている。生物に関連するものが岩石中などに残されていると化石と呼ばれる。化石にはさまざまな情報が含まれており，過去を知る重要な手掛かりである。三葉虫，アンモナイト，恐竜など代表的な大型化石を中心に観察し，

化石からなぜ過去の環境が推測できるのか，また年代が分かるというのはどうしてか，について，現在へとつながる生物の変遷を念頭に置きながら，説明をした。

代表的な大型化石の観察を交えて生物の変遷を話した後で，肉眼で特徴を識別することが困難な微化石を題材として，実習を行った。微小な生物は数え切れないほど生存しているが，過去も同様であり，その一部は化石として岩石中に含まれている。微化石というものがどのようまものかについて，冬休みの課題として調べさせた後で，紡錘虫（フズリナ類）を題材とし，それが岩石中に含まれている様子や形態の特徴を観察するために，岩石を磨くという作業を行った。そして，微小な化石を使用する利点を，示準化石という言葉の説明とともに行い，また「星の砂」の仲間であることを示して，それらが過去の環境を類する手掛かりにもなることを補足説明した。昨年度と同様に，何億年も前の岩石の中から化石を見つける，ということは，受講生にとってわくわくする経験であり，磨いた面のどれが化石であるかを教えると，熱心に見入っていた。岩石をハンマーで割って，アンモナイトなどを探すという作業ができれば貴重な経験となるであろうが，何十人にもアンモナイトの入った資料を渡すことは難しい。微小な化石であれば，ごく少量の岩石を用意すれば良く，化石を見出す経験として，手軽にできる手段ではないかと考えている。化石に対する関心を高めるための実習であるが，化石を探すという実体験として，有用と考えている。

少人数ということもあり，実験中を除いては授業中の私語は見られず，授業の雰囲気は良かったと思っている。授業アンケートの自由記述はわずかであったが，「いろいろな化石を見ることができて良かった」という意見が見られた。ただし，繰り返しになるが，出張や祝日等の関係で，前半の講義内容が細切れになった感がある。元々の授業設計とは異なってしまうが，祝日等で間の開きやすい月曜や金曜の授業は，トピック的な回も作り授業の組み立てを柔軟にすることが必要なのかも知れない。

次年度は夜間主コースの授業担当であり，「創生授業」は一休みとなる。少し気分を変えて，”サイエンス体験”としての，実験内容を検討する機会としたい。